

30 復活

星野博美

夜、家に帰り、鍵を回す。必ず振り返り、後ろに人がいないことを確認してからドアを開け、素早く入ってドアを閉める。香港・深水埗に住んでいた時に身につけた習慣だ。

香港の名誉のために付け加えるが、香港は治安の良い街である。命を奪われるとか金品を強奪されるとか、あるいはいきなり見ず知らずの人から殴られるような、得体の知れない恐怖を感じたことは一度もない。

それは香港が常に混んでいて人目があり、しかも人々がお節介体質で、トラブルに巻きこまれそうになると、どこからともなく人が集まってきて、結局人目の多さが守ってくれるからだ。

その治安の良さをいいことに私は、午前二時や三時に街を平気でうろつくような生活を送っていた。しかし宵っぱりのこの街でも、さすがに丑三つ時は通行人が少なくなる。人目のない時間帯は、自衛するしかない。それが、いつしか身に着いた、後ろを振り返る習慣なのだった。

ある時香港で、いつものようにささっとドアを開けてささっと中に入り、ふと感慨深く思ったことがあった。

自分がいま恐れているのは地上の人間であって、幽霊ではない！と。仮に目の前に、幽霊が現れたとする。しかし私は香港のスタンダード

な幽霊がどのような姿形をしているかを知らないから、それを即座に幽霊だとは認識できないだろう。

仮に認識でき、恐怖にかられたとしよう。そして幽霊が何かを言う。

幽霊が話すのは広東話か、あるいは香港に話者の多い潮州や東莞といった地方の方言であろう。幽霊は「飯は食ったか？」とか「調子はどうだ？」みたいなことは、多分言わない。言うとしたら「この恨み、晴らさでおくべきか」みたいなこと。しかし私は「恨み」や「晴らす」といった語彙を知らない。そんな言葉は学校では習っていない。言われても意味がわからず、「請你再講一次」(もう一度言ってください)とお願ひすることになる。こやつには我が恨み通じず、と思えば、幽霊は立ち去るだろう。幽霊だって効率を計算するはずだ。

仮に、自分が恐れる幽霊像にびたりとあてはまる、日本語話者の幽霊が、香港で暮らす私の目の前に現れたとする。そんな場合は一瞬恐怖にかられるだろうが、同時に「幽霊は外国にも来られるのか?」「日本で怖がらせたほうが効率よくないか?」とツツコミを入れたくなり、恐怖の度合いは弱まるだろう。

つまり、外国にいる限り、幽霊の存在感は極めて薄くなるのである。自分がある人を死に至らしめて直接的な恨みを買った場合を除いて、幽霊は国境をまたがない。幽霊の恐怖から逃れたければ、外国を渡り歩けばよいかもしれない。

以前この連載で、マイケル・ジャクソンの「スリラー」について少し

触れたことがある。墓場から復活したゾンビたちが追いかけてきて踊る様子は、不気味ではあっても、私にはまったく恐怖の対象ではなかった。土葬文化と「復活」の概念を持つキリスト教文化を共有していないと、あれを怖がることなどできない。だからハリウッドのホラー映画を、私は怖く感じない。私が恐れるのは、やはり「八つ墓村」や「犬神家の一族」の世界観。恐怖には、物語の共有が必要なのだ。

「復活」といえば、実に興味深く感じた事例がある。

キリシタン迫害の取材で、長崎県の大村市を訪れた時のことだ。

大村は、キリシタン大名第一号の大村純忠が治めた土地で、長崎はもともと純忠がイエズス会に寄進した港だった。領民の強制改宗が積極的に行われたことの是非はともかくとして、多数のキリシタン領民を抱え

た土地だった。

家督を継いだ息子の喜前よしあきは幼児洗礼を受けたキリシタンだったが、純忠の死後、熟考した末、自らすすんで棄教する道を選択した。私はキリシタンにシンパシーを寄せる人間ではあるが、この喜前の苦渋の決断を簡単に非難する気にはなれない。同じキリシタン大名の治めた土地で、歯車が何もかも狂った末に、島原の乱で領民ほぼ全滅という悲惨な結果を招いた有馬のケースがあるからだ。宣教師から見たら、喜前は地獄に落とされる背教者だろうが、多くの領民の命を守ったという点で、有能な為政者だったともいえる。

それはさておき、島原の乱が終結し、宣教師たちも死に絶えてしばらくたった頃のことだ。明暦三（一六五七）年、大村領内で大規模な「崩

れ」(キリシタン発覚事件)が起きた。六〇八名が捕縛され、うち四一一名が死罪に処せられるという、藩の存続に黄信号が灯る緊急事態だ(被処刑者の中には大村家の召使いも含まれていた)。発端となった地名をとって、「郡崩れ」と呼ばれている。

多少巡礼したい気持ちもあり、「郡崩れ」で処刑された人たちが埋葬された場所を訪れた。奇妙なことに、首だけを埋めた「首塚」と、胴体だけを埋めた「胴塚」が数百メートルほど離されていた。突然風が吹き始め、さやさやと音を立てる周囲の竹藪に不気味な気配を感じながら、私はこの距離について考えこんでしまった。

首と胴がくっついて復活することを恐れた、ということだろう。つまり、処刑されて体を切り離された人たちと、殺して埋めた側の人たちが、

「復活」という概念を共有していた証のように、私には見えたのである。ほんのひと昔前まで、領主を含めた全員がキリシタンだったのだから。

世界の終わりにキリストが再臨して、死者は甦り、裁きが行われる。もちろんキリスト教は、死体の復活を信仰する宗教ではない。しかし多くの者が棄教し、宣教師不在で教義の枝葉が抜け落ちてゆくなか、「復活」のイメージだけが強烈に記憶され続けたのだとしたら、死者の甦りは相当リアルな恐怖だったに違いない。

いくら信仰を棄てたとはいえ、半世紀あまり根を下ろした死生観は、そう簡単に塗り替えられるものではない。大村では、首を探す胴体だけの幽霊が多く目撃されたかもしれない、などと想像したのだった。

さて先日、香港を再訪した際に興味深いことがあった。私は留学時代から付き合いがある唯一の友達、シェリーに会い、旧交を温めた。彼女は深水埗出身だった。私たちはその日も深水埗でごはんを食べ、香港最古の団地銀座である石硤尾の坂道を連れだって歩いていた。すると彼女が昔話を始めた。

「子どもの頃、この道が怖かったの。お母さんからも言われたものよ、夜に一人で歩いちゃいけないって」

「どうして？」

「おばけが出るからよ」

おばけと聞いて私は興奮し、話の続きをせがんだ。しかし彼女は躊躇する。「昼間だから大丈夫。私がついてる」と励ますが、「博美がいると、

出てくる可能性が余計に高まるのよ」と訳のわからないことを言う。こんな次第だった。

香港が日本に占領されていた時、日本兵が乱暴を働き、路上でたくさんの人を殺した。その死体置き場が石碓尾だった。だから石碓尾には夜になると、首を探すおばけや子どもを探す女性のおばけが出るのだという。

私はうなだれた。いまでは日本に好意を寄せる人も多い香港だが、戦争の記憶がまだ濃かった八〇年代、私はとどころでお年寄りにつきまわり、日本兵の残虐性を責められた。香港にもまだ当時の記憶が残っていることを忘れてはいけないのだと、久々に痛感させられた。しかもその恐怖は、香港人の恐れる幽霊像と結びついている。そう簡単に払拭できるものではない。

「それは本当に申し訳ない」と謝罪すると、「いや、謝ってもらいたくて話したわけじゃないのよ。ただ当時は本当に怖かっただけ」と彼女は私を氣遣った。

「怖くなってきたわ。早くここから抜けましょ」

そう言つて彼女は私の手をとつた。

シエリー、でも私は全然怖くないんだよ。そのおぼけがどんな格好をしているか知らないし、話しかけられても、多分意味がわからないから。そう口まで出かかった言葉を呑みこみ、彼女の手を握りながら早足で歩いた。